

# 動脈硬化および血管炎症が脳血管性認知症発症に及ぼす影響の解明

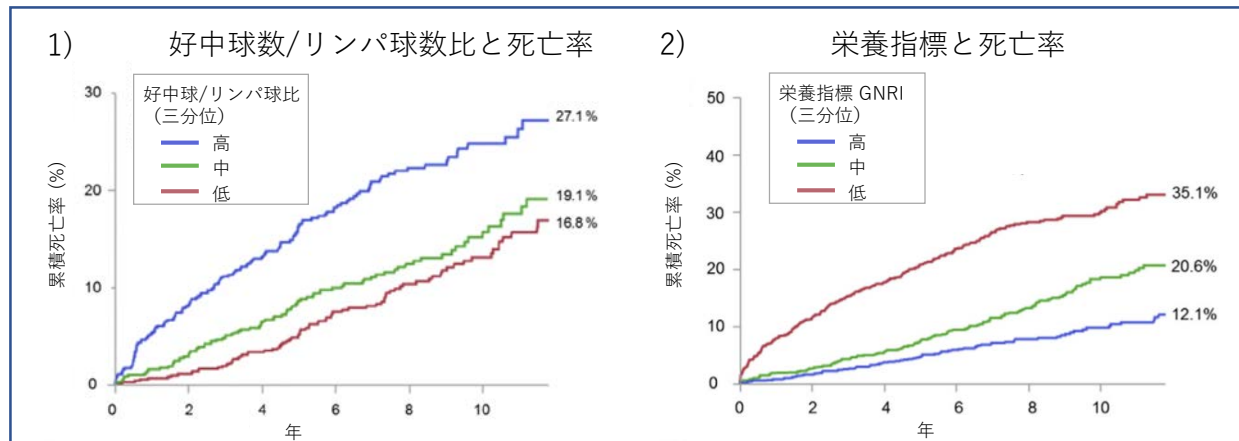
代田 浩之（だいた ひろゆき） 順天堂大学・大学院医学研究科長・医学部長・循環器内科学・教授

昭和54年順天堂大学医学部卒業、平成4年同大学大学院医学系研究科修了 博士（医学）、昭和54年虎の門病院 内科、昭和60年 順天堂大学循環器内科、平成7年 同大学循環器内科 助手、平成7年 同大学循環器内科 講師、平成12年同大学循環器内科 教授、平成18年 同大学医学部附属順天堂医院 ハートセンター長兼任、平成20年 同大学大学院医学研究科トロンポセンター 副センター長兼任、平成20年 同大学 医学部附属順天堂医院オーダーメイド医療プロジェクト室副室長兼任、平成20年 同大学医学部附属順天堂医院 副院長兼任、平成24年2月 台北医科大学 客員教授

<http://www.juntendo.ac.jp/graduate/kenkyudb/search/researcher.php?MID=891>



アルツハイマー型認知症と異なり、脳血管性認知症は動脈硬化がその主因であり、認知症の発症の制御や進行の抑制ができる可能性が高い。コレステロール治療薬のスタチンが認知症発症抑制をもたらす可能性が報告されているが、その他の有効な治療法に関しては明らかにされていない。われわれは、これまでに、長期にわたる全身の炎症の主役である白血球のうち、好中球数のリンパ球数に占める割合が高いほど、すなわち好中球が多いほど冠動脈疾患症例の死亡率が上昇すること、さらには全身の炎症が持続することに起因する低栄養が死亡率を上昇させることを明らかにした。そこで、我々は動脈硬化が認知症発症を起こす過程を多次元イメージングで観察する。ついで、動脈硬化による慢性炎症が認知症に及ぼす影響を検討すると共に、抗炎症性サイトカインによる炎症抑制が認知症発症や進行を抑制しうるかをイメージングにて検討し、新しい観点からの治療を開発することが、今回の目的である。



- 1) 冠動脈疾患では、好中球-リンパ球比率が予後予測因子となる。
- 2) 高齢者の栄養リスク評価指数が、心臓カテーテル治療後の予後予測因子となる。

参画メンバー

岩田 洋 大学院医学研究科・循環器内科学・准教授  
磯田 菊生 大学院医学研究科・循環器内科学・准教授  
喜多村 健一 大学院医学研究科・循環器内科学  
三代沢 勝利 大学院医学研究科・循環器内科学

関連論文

1. Atherosclerosis. 2017;265:35-40 Pre-procedural neutrophil-to-lymphocyte ratio and long-term cardiac outcomes after percutaneous coronary intervention for stable coronary artery disease
2. Am J Cardiol. 2017;119(11):1740-1745 Prognostic Impact of the Geriatric Nutritional Risk Index on Long-Term Outcomes in Patients Who Underwent Percutaneous Coronary Intervention